平成19年3月25日（日）

吹田操車場遺跡06－1の調査

（財）大阪府文化財センター

吹田操車場遺跡調査地点と周辺の主な遺跡

1．はじめに

吹田操車場遺跡は、昭和42年に操車場で工事が行われた際、中世土器が出土し発見された遺跡です。その後幾度かの発掘調査が実施され、古墳時代後期の須恵器大甕埋納遺構や群集土坑、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落跡、平安時代前期の建物などの遺構が見つかり、旧石器時代のサヌカイト片、奈良三彩小壺、瓦片、緑釉陶器などの遺物が出土しています。

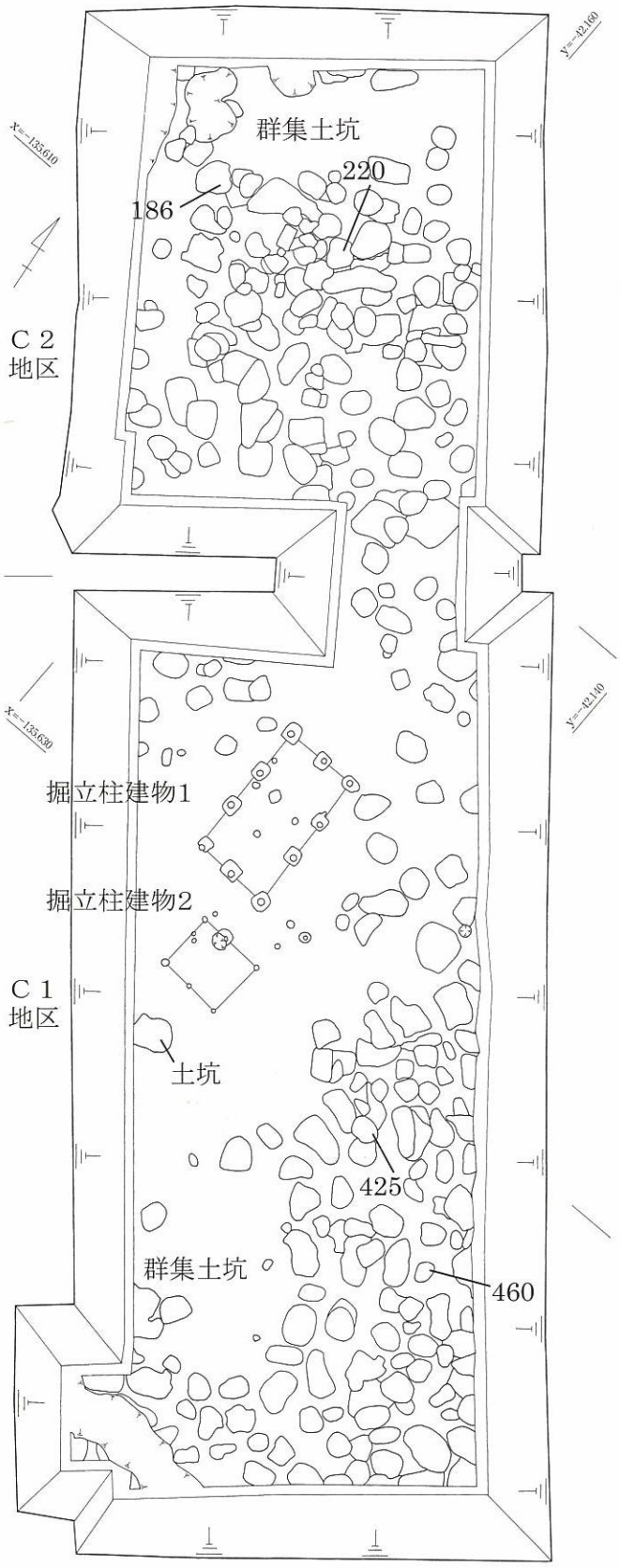
このたび当センターは、吹田信号場基盤整備に伴う工事に先立ち、C１・C２地区、C３・C４地区、C５・C６地区の３ヶ所の調査を実施することとなりました。

C１・C２地区全景（北西から）

C２地区全景（東から）

C１地区掘立柱建物１（南から）

C１地区土坑遺物出土状況



約 S=1/300

C１・C２地区遺構配置図

２．調査成果

調査区中央で梁間２間・桁行３間の掘立柱建物1を検出しました。面積は23㎡で、建物の柱穴の掘り方は一辺60～80㎝、深さ30～50㎝の方形で、柱の太さは25㎝ありました。この建物は建て替えの形跡はありませんでした。柱穴から須恵器片が１片出土したのみで、他に遺物は出土しませんでした。

この建物の南側で、梁間１間・桁行２間の掘立柱建物２を検出しました。面積は８㎡で、柱穴はいずれも径20㎝程度、深さ10㎝の円形で、掘り方から遺物は出土しませんでした。

掘立柱建物の南側で、一辺約 1.6m、深さ約1.3mの不整方形で、筒状に掘られた土坑を検出しました。「井戸」とするには、湧水層にも達しておらず水が溜まった形跡もないので、「土坑」としています。この土坑の構造は、約40㎝掘り下げたところで、幅20～40㎝の段をつくり出し、そこに平行するように丸太材を２本渡しています。足場もしくは蓋をするための施設だった可能性があります。

この土坑の廃棄に伴って、聖武天皇が神亀３（726）年に造営を開始した後期難波宮で用いられた瓦と同型式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、獣脚円面硯などが出土しました。

群集土坑は、前述した２棟の掘立柱建物や土坑周辺を除く調査範囲のほぼ全域で総数312基見つかりました。これらの土坑の大半は楕円形を呈し、その多くが掘り方の一部で重複しています。土坑の多くは、埋め戻されていましたが、16基の土坑は、埋土の状況から見ると自然に埋まったものと思われます。

埋め戻された土坑のうち20基から、古墳時代の終わりから奈良時代前半（７世紀前半から８世紀前半）の須恵器や土師器の底部・体部片が出土しました。出土した須恵器は焼成不良のものが多く見受けられます。

C２地区 220 土坑遺物出土状況

C２地区 186 土坑遺物出土状況

C１地区 460 土坑断面

C１地区 425 土坑断面

群集土坑出土遺物

左：須恵器　甕

中：須恵器　壺

右：須恵器
　　把手付甕

後期難波宮で用いられていた瓦と同型式の軒丸瓦

墨書土器

獣脚円面硯（じゅうきゃくえんめんけん）

3．まとめ

掘立柱建物の横から検出された土坑から、後期難波宮で使用された瓦と同型式の軒丸瓦や獣脚円面硯が出土しました。そのほか包含層から、須恵器・土師器とともに緑釉陶器・灰釉陶器、瓦が見つかりました。また「福」「土」という文字のほかに、文字とも記号とも判別つきがたい墨書土器も出土しています。

群集土坑は今から20年ほど前から確認されはじめ、現在府内で21例が知られています。

今回、掘立柱建物2棟及び土坑と並存して掘られたことが明らかとなりました。

吹田操車場遺跡06－1の調査　平成18年度　吹田信号場基盤整備工事に伴う発掘調査
発行/　(財)大阪府文化財センター　〒590-0105　堺市南区竹城台3丁21番4号　TEL072-299-8791
印刷/　株式会社中島弘文堂印刷所　発行日 2007年3月25日